

古代イスラエルにおける一神教と神の再定義

はじめに

アダ・タガー＝コヘン

2012年12月15日、同志社大学神学部において、CISMORの招聘を受けたマーク・スミス教授（ニューヨーク大学）、エリザベス・ブロッホ＝スミス准教授（ユニオン神学校）の両名を講師に迎え、「ヘブライ語聖書の時代における一神教の概念」をテーマとする公開講演会ならびに研究会が開催された。

20世紀、新しい方法論を用いた新解釈が古代イスラエルの宗教研究に導入され、ヘブライ語聖書の宗教研究に新たな視座が加えられた。この展開の大きな力となったのが、イスラエルに隣接する古代文化圏で発見された新たな文書や遺物の存在である。古代エジプト、メソポタミア、アナトリア、レバント地方（シリアーレバノン）の文書が解読され、研究が進められた結果、史実に関する聖書の記述や、ヘブライ語聖書に見られる思想や信仰の起源および背景をたどることが可能になったのである。加えて、イスラエルをはじめ上記の地域で考古学研究が積極的に進められたことで、ヘブライ語聖書に描かれた複雑な宗教事情の理解に新たな扉が開かれた。古代イスラエルの宗教研究の中心的テーマの一つが「一神教信仰」、すなわち宇宙の創造者にして支配者であり、イスラエルの民を一つの民族として自ら選別した唯一神に対する信仰の起源を解明することである。古代中東地域の文書の研究が進めば進むほど、この信仰の特異性がますます大きく浮き彫りにされている。

ヘブライ語聖書の研究により、紀元前7世紀のヒゼキヤ王とヨシヤ王の時代に信仰のあり方に明白な変化が生じたことが分かっている。この変化については、当時の国際事情を視野に入れた歴史的解釈も含め、様々な解釈が施されている。このテーマは過去30年来研究界の中心的課題であり、紀元前の第一千年紀前半の古代イスラエルにおける宗教世界の実態を明らかにするべく、様々な試みが進められてきた。

マーク・スミス教授は、過去30年間 YHWH 信仰の起源の研究を牽引してきたこの分野の第一人者である。氏の研究はウガリット文書に登場するカナン神々と YHWH との比較に焦点を当てており、その研究成果によりヘブライ語聖書に描かれた YHWH 像の背景が解明されている。さらに氏の研究対象は、唯一神 YHWH の定義の起源にまで及んでいる。今回の研究会ではその最新の研究成果について詳しい報告が行われ、紀元前7世紀が過渡期であったことと、イスラエルの一神教の起源と成立については、古代

中東全域を支配したアッシリアの台頭が重要な転機となったことが指摘された。また氏によると、古代イスラエルの家族を取り巻く新たな社会不安が「個人の罪は本人の責任に帰する」という新しい考えを生み出し、この考えが、神とは「神的行為の領域で責任を担う唯一の民族神」であるという理解に反映されているという。

エリザベス・ブロッホ＝スミス准教授は、イスラエルで行われた発掘調査に基づく考古学的視点からの考察を行い、アッシリア軍の台頭により、紀元前7世紀にユダ王国の信仰が一元化されたことを証明した。氏の論文にはアッシリアのもたらした影響として二つの点が指摘されている。一点はアッシリア軍の進撃がユダ王国の諸都市に与えた衝撃と壊滅的被害である。またもう一点として、氏はアラドの町の考古学的発見を紹介し、エルサレム、すなわち「主がその名を置くために選ばれる場所」以外の礼拝所の破壊を命じたという申命記の記述との共通点を論じている。

今回の研究会で発表された兩名の論文に加え、本誌には私自身の論文も収録した。これは、ヒッタイト文化における神の概念を念頭に置いた上で、ヘブライ語聖書の神の概念をいかに理解するかを論じたもので、古代イスラエルの宗教を当時の中東近隣諸国の信仰の一部として考察することを目的としている。敢えて「一神教」の概念について論じることはせず、個人神とも言うべき一人の特別な神、個別に崇拝されているが、決して排他的ではない神の存在を指し示したいという思いを込めた内容となっている。